

「オンライン脱抑制」再考：心理尺度作成とメカニズムの検証

代表研究者 三浦 麻子 大阪大学 大学院人間科学研究科 教授
共同研究者 温 若寒 大阪大学 大学院人間科学研究科 博士後期課程 2年

1 研究背景

「オンラインのような仮想世界では、人は現実社会ではしないようなことをしてしまう」という言説がよくある。例えば、対面場面ではあまり話さないような自分の秘密をオンラインで開示する人がいたり、匿名の SNS で炎上事件の渦中にある人に現実社会では到底口にできないような過激な批判をする人がいたりする。Suler (2004) は、このようにオンラインで現実社会とは異なる振る舞いが現れる現象を「オンライン脱抑制効果」によるものとして説明した。オンライン脱抑制理論は、オンラインでの人間の行動や心理の特徴を指摘するものとして、近年の行動・社会科学研究、情報学研究などで大いに存在感を放ってきた。しかし Suler (2004) は理論を提出する際、オンライン脱抑制について具体的で明確な定義を行っておらず、それゆえ後続研究におけるその定義は非常に多様なものになった。温・三浦 (2022) は、これまでの先行研究のオンライン脱抑制の捉え方には、「発生」(主に Suler の指摘した 6 要因に源を發する、オンライン脱抑制効果を発生させるオンライン環境や CMC の客観的な性質)、「行動」(主にネットいじめ、ネット荒らし、オンラインでの自己開示といった具体的で典型的な行動)、そして、「発生」と「行動」の両者をつなぐオンライン脱抑制的な「心的状態」(個人において発生・経験する抑制が解除される心的状態) という 3 つの視点があり、視点によって構成概念の捉え方が異なることを指摘している。こうしたオンライン脱抑制の構成概念の錯綜は、測定ツールの開発を複雑な課題にさせる。

本研究では、心理学研究において適切なオンライン脱抑制の構成概念を基に、オンライン脱抑制を多次元で測定できる尺度を作成し、オンライン脱抑制の影響メカニズムを探索的に検討することを目的として 3 つの研究を行った。研究 1 では、日本語版多次元オンライン脱抑制尺度を作成する。研究 2 では、ネット掲示板の閲覧場面を使用して、オンライン脱抑制とネット上での意見表出との関係を検討する。研究 3 では、日本語版尺度に基づいて中国語版尺度を作成した上で、日本人と中国人のオンライン脱抑制を比較する。

2 研究 1 日本語版多次元オンライン脱抑制尺度の作成

近年、オンライン脱抑制の測定において重要な貢献をしたのは Stuart & Scott (2021) である。彼女らは、既存尺度の Online Disinhibition Scale (Udris, 2014、以下、ODS とする) の限界を踏まえ、オンライン脱抑制に明確な定義を与え、1 因子 12 項目の Measure of Online Disinhibition (以下、MOD とする) を作成した。そして、ネット荒らしやオンラインでの自己開示との正の関係を見いだしてこの尺度の構成概念妥当性を確認した。

しかし、MOD は的確にオンライン脱抑制的な心的状態を測定できる尺度である一方で、最終的な項目は非常にシンプルだという限界もあり、人をオンライン脱抑制的な心的状態に至らしめる具体的な認知変化の過程についての言及を含んでいない。例えば、Suler (2004) を踏まえると、現実世界では人々は自らの社会的アイデンティティに従って振る舞うが、匿名のオンライン環境に入ると、社会的アイデンティティに関する認知が曖昧になるので脱抑制につながる。このような自らの社会的アイデンティティに対する認知が、現実の場面では人の行動を抑制する役割を果たしているが、オンライン環境ではそれらの抑制が効かなくなるが (cf. 温・三浦, 2022)、ただ表層的な心理状態の変化を問う項目からなる単一因子構造の MOD では、どのような認知による行動抑制機能の解除が発生するかを具体的に検討できない。従って、本研究では、認知による行動抑制機能がオンライン環境で解除するという視点からオンライン脱抑制の多次元構造を探索し、多次元オンライン脱抑制尺度 (Multi-Dimensional Measure of Online Disinhibition: MMOD) を開発する。

2-1 半構造化インタビューと項目作成・翻訳

2021 年 1 月から 3 月に、ネット利用経験をもつ中国人 20 名に対して半構造化インタビューを行った。実施時間は 1 時間程度とし、謝礼は 30 から 50 人民元 (450 円から 750 円相当) /1 時間とした。

文字起こししたデータの内容分析に際しては、心的状態としてのオンライン脱抑制に関わる社会的事象の

認知を抽出した。なるべく効率よく精査するために、先行研究を参考にして、オンライン脱抑制的な心的状態に関する認知の種類について、予め8つのカテゴリーを便宜的に設定し分類を行った。8つのカテゴリーはそれぞれアイデンティティに関する認知の低下、社会的ネットワークに関する認知の低下、現実モードの低下、不道徳認知の低下、行動の制御可能性、社会的リアリティの低下、思いやりの低下、疎遠さ認知の低下である。内容分析結果に基づき、予備尺度項目を作成した。まず中国語で73項目（各カテゴリーにつき7から15項目）を作成した。次に、中国語の項目を日本語に翻訳し、本研究の目的と手続きを知らない社会心理学者による逆翻訳を経て、日本語の表現の妥当性を検討し確認した。さらに、複数の社会心理学者の意見と合わせて、日本語表現がより自然なものとなるように修正した。

2-2 予備調査と予備尺度の作成

2回の予備調査を行い、多数の参加者にとって答えやすいことと、天井効果や床効果がないことを判断基準にして、項目が心理尺度として適切かどうかを検討し、必要な修正を行った。最後、尺度の構成概念の広さと回答しやすさを考慮してオンライン脱抑制予備尺度を構成した。

(1) 調査票の構成

1. 調査主旨の説明

2. 回答者の基本的なネット利用状況。具体的には、日常生活においてネット利用が占める割合、ネットだけで連絡を取る友人の有無、ネット上でトラブルの当事者になった経験の有無の3つの質問からなる。

3. オンライン脱抑制予備尺度項目。「1. まったくそう思わない」から「6. 非常にそう思う」の6件法で回答を求めた。それ以外に、回答者のネット利用状況に合致しないなど判断が難しい項目は「自分には該当しない」を、日本語が理解しにくい項目は「項目の意味が分からない」を選択するよう求めた。なお、努力の最小限化（三浦・小林, 2018）状況を確認する注意カチェック項目（「ここでは必ず『そう思う』を選択してください。」）を1項目含めた。この項目で「そう思う」以外の回答を選択した回答者のデータは分析対象から除外した。

4. TIPI-J（小塩・阿部・カトローニ, 2012）。オンライン脱抑制とパーソナリティとの関連を探索的に検討するためにBig Fiveを測定したが、この関連を検討することは本研究の目的とは異なるので、その結果については言及しない。また、第2回予備調査ではTIPI-Jを使用しない。

5. 年齢、性別、最終学歴。

6. 意見や質問の自由記述。

(2) 参加者

クラウドソーシング事業者（株式会社クラウドワークス：以下、事業者とする）に業務委託し、18歳以上の日本語話者を募集した。第1回予備調査では100円の謝礼で1000名、第2回予備調査では168円の謝礼で500名を募集した。

(3) 結果

多数の参加者にとって答えやすいことと、天井効果や床効果がないことを判断基準にして、項目が心理尺度として適切かどうかを検討し、必要な修正を行った。第2回予備調査の結果に対して、項目作成時に用いたカテゴリーを踏まえた8因子解の他、5、6、7因子解の探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行って、構造を検討した。どの解でもすべての因子負荷量の絶対値が.35未満となった15項目、事前の想定とは異なる方向の因子負荷量を示した1項目を削除した。そして、残された49項目に対して、概念構成上の重要性および回答しやすさを基準としてカテゴリーごとに2から5項目を抽出した。抽出された25項目をオンライン脱抑制予備尺度（表1）とする。

2-3 最終版尺度の作成および妥当性と信頼性の確認

オンライン脱抑制予備尺度を基に、より洗練された尺度を作成し、妥当性と信頼性を検討する。3回の調査を行い、2つの因子構造を探索し、確認的因子分析で適合度を比較しながら最終的な尺度の確立を目指す。妥当性は、本尺度作成のベースとしたMOD（Stuart & Scott, 2021）との相関関係による基準関連妥当性を検討し、信頼性は各因子の内的整合性（ α 係数）と合成信頼性（Composite Reliability: CR）を検討する。

(1) 調査票の構成

1. 調査主旨の説明

2. 回答者の基本的なネット利用状況。

3. オンライン脱抑制予備尺度項目。「1. まったくそう思わない」から「6. 非常にそう思う」の6件法で回答を求めた。回答者のネット利用状況に合致しないなど判断が難しい項目には「分からない」を選択する

よう依頼した。また、注意力チェック項目 1 項目を含めた。

4. MOD (Stuart & Scott, 2021) の日本語翻訳に「1. まったく当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」の 5 件法で回答を求めた。

5. 日本語版 ODS (Udris, 2016) 全 11 項目に「1. 当てはまらない」から「4. 当てはまる」の 4 件法で回答を求めた。

6. 年齢、性別、最終学歴。

7. 意見や質問の自由記述。

(2) 参加者

2021 年 9 月 10 日から 9 月 23 日まで、事業者に業務委託し、3 回の調査を行った。毎回のサンプルサイズが 500 名程度とした。

表 1 オンライン脱抑制準備尺度

項目	カテゴリー
1 ネット上で何をしても現実の自分のイメージには影響しにくい。	アイデンティティに
2 ネット上での発言や行動は、現実社会での身分や地位に縛られることは少ない。	関する意識の低下
3 ネット上では、たとえ良くないことをしたと思っても、それほど大きな罪悪感を抱かない。	不道徳認知の低下
4 ネット上では、現実社会では守れるようなモラルを守れない時もある。	
5 ネット上での人間関係は希薄なので、いつでもそこから抜け出すことができる。	
6 ネット上での人間関係には浅いものが多く、深いつながりはあまりない。	社会的ネットワーク
7 ネット上でできる友人や知り合いは、現実社会では接点がなさそうな人がほとんどだろう。	に関する意識の低下
8 ネット上で他の人に好き勝手なことを言っても仕返しされることはないだろう。	
9 ネット上では、流行している人や物を自由に批評することができる。	社会的リアリティの
10 ネット上では、ものごとの善悪の判断が現実社会ほど複雑ではない。	低下
11 ネット上では、人や物の流行を自分の思い通りに動かすことができる。	
12 現実社会よりネット上の方が、自分の期待に沿う人に多く出会える。	
13 ネット上で接している人たちは、現実社会の知り合いより自分と似た価値観を持っていると感じる。	疎遠さ認知の低下
14 ネット上には、現実社会での挫折や苦しみを理解してくれる人がいる。	
15* ネット上で見知らぬ人たちに親近感を抱くことはない。	
16* ネット上のパブリックな場所での発言や行動が、他人に不快感を抱かせないようにいつもよく考えている。	
17* ネット上では、自分の発言や行動が友人や知り合いとの関係にどう影響するかを常に気にしている。	思いやりの低下
18* ネット上で見知らぬ人に DM することになったら、相手の迷惑になるかどうかを考える。	
19* ネット上で発言したり行動したりする時、いつも家族がどう思うかを気にかける。	
20 ネット上で私の発言や行動を誤解する人がいても仕方がない。	
21 ネット上では、現実社会のさまざまな制約を受けずに自分の好きなようにふるまうことができる。	現実モードの低下
22 ネット上では、現実社会とは異なるルールに従って行動することがある。	
23 現実社会では見せたくないような自分の一面でも、ネット上では出せる場所がある。	
24 ネット上で対話している時の自分の状況は、相手には分からないだろう。	行動の制御可能性
25 ネット上では、相手との関係を続けたくないと思ったら、いつでも終わりにすることができる。	

注：*：逆転項目

(3) 結果

第 1 回調査の結果に対して、まずスクリー・プロットを参考に、全項目を対象に 4 因子解の探索的因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行った。そして、因子負荷量の絶対値が .40 未満となった 5 項目 (番号 2、7、20、22、24) を削除した後、単純構造が得られた。次に、回答者の負担を考慮して、項目数を必要最小限にするために、答えにくいと思われる 3 項目 (番号：4、10、15) を削除した。さらに、4 因子解の探索的因子分析を行い、因子負荷量の低い項目を削除して、4 因子 15 項目の単純構造 (以下は構造 A とする) が得られた。ここでも単純構造が得られたが、項目 16 は多重負荷の可能性があるので第 2 回調査を行い、新たなサンプルによるデータで構造 A の妥当性を確認する。

第2回調査の結果を用いて構造Aに基づく確認的因子分析を行った。各因子の内的整合性 (α 係数) は全体的に低く、特に第4因子 (.56) でかなり低かった。改めて項目内容を検討し、回答者が想定する現実社会のソーシャルネットワークの影響を尋ねる2項目 (番号: 17, 19) は不安定になりやすいので削除した。第1回調査と第2回調査を合併した943件のデータを分析対象として、項目17と項目19を削除した13項目を対象に3因子解の探索的因子分析を行った。因子負荷量の絶対値が.40未満となった項目11を削除した12項目を対象に再度3因子解の探索的因子分析を行った結果、新しい単純構造 (以下、構造Bとする) を得た。そこでこの構造Bの妥当性を確認するために再度データを収集し、構造Aと構造Bを比較しながら、最終的な因子構造を確定させることにした。

第3回調査の結果を用いて構造Bに基づく確認的因子分析を行った (表2)。適合度指標はCFIが.87、GFIが.94、AGFIが.90、RMSEAが.08であり、構造Aよりややよい。また、各因子の α 係数は.69、.74、.66、CRは.70、.75、.68であった。これらを構造Aと比較して、構造Bを多次元オンライン脱抑制尺度の最終的な因子構造とした。そして3つの因子をそれぞれどのような社会的事象の認知が変化するかをよく表現できるよう勘案して、第1因子「オンライン環境の特別視」、第2因子「疎遠さ認知の変化」、第3因子「つながり認知の変化」と命名した。

表2 構造Bに基づく確認的因子分析の因子負荷量

	項目	因子負荷量	Mean	SD
F1	3 ネット上では、たとえ良くないことをしたと思っても、それほど大きな罪悪感を抱かない。	.67	2.38	1.15
	8 ネット上で他の人に好き勝手なことを言っても仕返しされることはないだろう。	.65	1.98	0.93
	1 ネット上で何をしても現実の自分のイメージには影響しにくい。	.56	4.82	0.89
	21 ネット上では、現実社会のさまざまな制約を受けずに自分の好きなようにふるまうことができる。	.53	2.79	1.11
	16 ネット上のパブリックな場所での発言や行動が、他人に不快感を抱かせないようにといつもよく考えている。(逆転項目)	-.41	3.23	1.22
F2	12 現実社会よりネット上の方が、自分の期待に沿う人に多く出会える。	.77	3.59	1.10
	13 ネット上で接している人たちは、現実社会の知り合いより自分と似た価値観を持っていると感じる。	.72	3.40	1.15
	14 ネット上には、現実社会での挫折や苦しみを理解してくれる人がいる。	.57	3.99	1.02
	23 現実社会では見せたくないような自分の一面でも、ネット上では出せる場所がある。	.54	4.04	1.26
F3	5 ネット上の人間関係は希薄なので、いつでもそこから抜け出すことができる。	.83	4.01	1.09
	25 ネット上では、相手との関係を続けたくないとしたら、いつでも終わりにすることができる。	.60	4.28	1.05
	6 ネット上の人間関係には浅いものが多く、深いつながりはあまりない。	.49	4.07	1.13
	因子間相関	1	.18	.36
		2		.06

基準関連妥当性を検討するため、3回の調査を合併した1403件のデータを分析対象として、MMODと3つの因子とMOD日本語版 ($M = 2.65$, $SD = 0.66$, $\alpha = .86$) の相関関係を求めた。その結果、MMODの合計得点と各因子のいずれも、MOD日本語版と有意な正の相関が認められた。

2-4 考察

研究1では半構造化インタビューを通してオンライン脱抑制に関する項目を数多く作成し、複数回の調査データにより検討を行った結果、最終的に「オンライン環境の特別視」、「疎遠さ認知の変化」、「つながり認知の変化」の3因子構造からなる尺度を作成した。各因子の内的整合性 (α 係数) は全体的に十分に高いとは言えない値であったが、合成信頼性の指標のCRは許容範囲内 ($\geq .60$) に収まった (cf. Bagozzi & Yi, 1988)。MMODの全項目および各因子の平均値と改良元のMODの間には有意な正の相関が認められた。従って、本研究で作成された尺度は、オンライン脱抑制的な心的状態を、それをもたらす社会的事象の認知を踏まえ

てより網羅的に測定可能であると同時に、MOD と同様の妥当性を持つと考えられる。こうした多次元構造により、オンライン脱抑制に対する検討がより深まることが期待できる。

3 研究2 「動機づけ・オンライン脱抑制モデル」の探索的検討

3-1 研究目的

動機づけ・オンライン脱抑制モデル（温・三浦，2022）では、オンライン環境にける人の様々な行動を規定するのはオンライン脱抑制ではなく、人の動機づけだとされている。しかし、これまでネット上での行動に関する研究のほとんどが依拠している観察法では、動機づけ・オンライン脱抑制モデルの妥当性を実証的に検討することが難しい。従って、研究3では、実験的アプローチを通してモデルの妥当性を検証することを目的にする。ここでは、2023年3月末までに実施・分析が完了した予備調査の結果を報告する。

まず、本研究で採り上げる適切なテーマとして、ネット上で「炎上」した案件を探索して、2022年11月に徳島県のある高校で学校給食に食用コオロギ粉末が導入されたという出来事が、ネット上で2023年2月頃に話題となったことを対象とすることにした。この「コオロギ食」事件をテーマにして、架空の掲示板を閲覧する場面では参加者がどのような行動をするかを検討する。

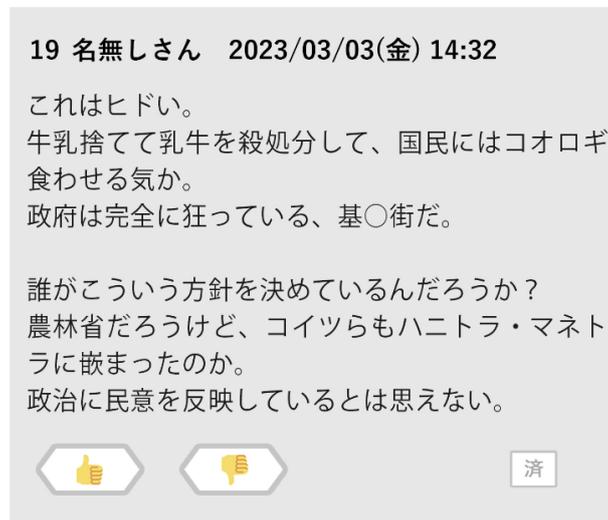


図1 投稿とリアクションボタン（例）

3-2 研究方法

まず架空のネット掲示板を作成した。「コオロギ食事件」の最中の、匿名掲示板「5ch」における日本の酪農業に関する議論を参考にした25個の投稿により構成し、投稿ごとに「いいね」、「よくないね」ボタンと「済」ボタンを設置した（図1）。調査票の構成は以下の通りであった。

1. 調査主旨の説明
2. 回答者の基本的なネット掲示板利用状況。
3. コオロギ食事件の紹介。
4. 掲示板投稿の閲覧。参加者には「気になる投稿には「いいね」あるいは「よくないね」ボタンを押す」「気にならなければ「済」ボタンを押す」「各投稿に必ずいずれかのボタンを押す」ことを求めた。
5. リアクションをした、あるいはしなかった原因
6. 多次元オンライン脱抑制尺度。
7. 年齢、性別、最終学歴。
8. 意見や質問の自由記述。

3-3 結果と考察

2023年3月16日に株式会社クラウドワークスに依頼して一般市民のネット利用者を募集した。「いいね」および「よくないね」の数、反応数（＝両者の合計）を計算し、MMODの総得点および下位3因子の得点

との相関関係を検討した（表 4）。その結果、反応数と「いいね」数はオンライン脱抑制および下位 3 因子と弱いが有意な正の相関があり、オンライン脱抑制傾向が高いネット利用者の方が、ネット掲示板でより多くの投稿に反応していた。

表 4 ネット掲示板への反応とオンライン脱抑制の相関

	反応数	「いいね」数	「よくないね」数	Mean	SD
「いいね」数	.76 **	1		5.83	4.19
「よくないね」数	.83 **	.27 **	1	5.56	4.83
MMOD 総得点	.22 **	.25 **	.10 *	3.41	0.53
F1 得点	.15 **	.14 **	.09 +	2.61	0.76
F2 得点	.16 **	.20 **	.06	3.62	0.81
F3 得点	.13 **	.18 **	.04	4.47	0.81

注: F1: オンライン環境の特別視、F2: 疎遠さ認知の低下、F3: つながり認知の低下

この結果は、オンライン脱抑制が直接に行動を規定する、という従来の「オンライン脱抑制・行動モデル」の考え方に支持する方向の結果のようにも思われる。しかし、全体的にオンライン脱抑制と意見表出の相関は高いとは言えない。各投稿への反応率（＝反応数/参加者数）は 27.2~67.0% ($M = .46$, $SD = .10$)とばらつきが大きく、参加者の反応への動機づけは投稿によって異なっていたと考えられる。この結果は、意見表出行動に動機づけの影響を加味すれば、モデルの説明力が高まる可能性を示唆している。

本調査では個別の投稿に対する参加者の動機づけは検討できないが、今後は、参加者の投稿への動機づけを操作・測定した上で、「動機づけ・オンライン脱抑制モデル」により動機づけ、オンライン脱抑制、行動の三者の関係を詳細に記述することを目指す。

4 研究 3 中国語版多次元オンライン脱抑制尺度の作成

4-1 研究目的

研究 1 では、中国人を対象にしてインタビューを行い、オンライン脱抑制に関する項目を数多く作成した。しかし、この中で、文化差やインターネットの利用環境の差などにより、中国人のサンプルが日本人のオンライン脱抑制の実態を十分に反映できていない可能性を否定できない。これまでオンライン脱抑制に関する研究の多くは研究対象を単一の文化に限定しており、オンライン脱抑制の多文化比較に関する知見が十分ではない。従って、研究 2 では、中国語版多次元オンライン脱抑制尺度を作成し、日本と中国のオンライン脱抑制の得点を比較し、文化心理学的な知見を産出することを目的とする。

4-2 研究方法

日本語版 MMOD を中国語に翻訳し、他の 2 人の中国人研究者の意見を参考にして中国語が自然になるように修正した。Lucid に業務依頼して日本人と中国人のデータを収集し、研究 1 で作成した多次元オンライン脱抑制尺度の 3 次元構造が再現できるかどうかを検討する。尺度の測定不変性を確認した上で、中国人のオンライン脱抑制と日本人のオンライン脱抑制の得点を比較する。

(1) 調査票の構成

1. 調査主旨の説明
2. 回答者の基本的なネット利用状況。
3. 多次元オンライン脱抑制尺度。「1. まったくそう思わない」から「6. 非常にそう思う」の 6 件法で回答を求めた。回答者のネット利用状況に合致しないなど判断が難しい項目には「分からない」を選択するよう依頼した。また、注意力チェック項目 1 項目を含めた。
4. 嘘検出項目。項目 16「ネット上のパブリックな場所での発言や行動が、他人に不快感を抱かせないようにといつもよく考えている」には建前的な表現が含まれるので、参加者が過大評価する可能性がある。そこで、項目 16 と矛盾した 2 つの嘘検出項目を作成し、多次元オンライン脱抑制尺度の中で入れた。項目 16 と 2 つの項目に同時に矛盾した場合、参加者の回答の信頼性が低いと判断し、分析対象から除外した。
5. Satisficer 検出項目。オンライン脱抑制現象を紹介した上で、オンライン脱抑制に関するあらゆる感想や経験を自由記述の形で記入することを求めた。この項目ではまったく無意味な内容、あるいはオンライン

脱抑制とは関係がない内容を記入した参加者を分析対象から除外した。

6. 年齢、性別、最終学歴。

7. 意見や質問の自由記述。

4-3 結果

2022年7月26日に800名の中国人のデータ、2022年7月30日に463名の日本人のデータを収集した。同じ基準でリストワイズ削除後、408名の中国人のデータと297名の日本人のデータを分析対象とした。中国人のデータを使用してMMODの3因子構造に基づく確認的因子分析を行った結果(表3)、 $p < .000$ 、 $\chi^2(51) = 233.929$ 、CFI = .842、GFI = .914、AGFI = .868、RMSEA = .094であった。従って、MMODの3因子構造が中国語版にも適用できると考えられる。

日中両国の尺度の測定不変性を検討するために、中国人と日本人のデータを使用して多母集団同時分析を行った。最初のモデルでは、すべてのパラメータに制約を設けず、配置不変性を検証した。このモデルでは、 $\chi^2(102) = 393.811$ 、CFI = .845、GFI = .915、AGFI = .870、RMSEA = .064という適合度を示した。次のモデルでは、測定不変性を検討した。このモデルでは、適合度に大きな変化がないことを示した： $\chi^2(111) = 403.256$ 、CFI = .845、GFI = .912、AGFI = .876、RMSEA = .061、 $\Delta\chi^2(9) = 9.445$ 、 $p = .397$ 。この結果より、中国人と日本人の間で項目の得点を直接に比較することが可能である。

MMOD、3つの因子とすべての項目に対してt検定を行った。その結果、中国人のMMODは日本人よりも有意に高く、効果量 $d = 0.73$ とかなり大きいことが分かった。さらに、3因子のスコアがすべて日本人よりも有意に高く、F1とF2の効果量は中程度であったが、F3は比較的低かった。

表3 MMODに基づく確認的因子分析の因子負荷量(了解性を高めるため、項目は日本語で記載した)

	項目	因子負荷量	Mean	SD
F1	3 ネット上では、たとえ良くないことをしたと思っても、それほど大きな罪悪感を抱かない。	.70	2.39	1.14
	8 ネット上で他の人に好き勝手なことを言っても仕返しされることはないだろう。	.70	3.04	1.25
	1 ネット上で何をしても現実の自分のイメージには影響しにくい。	.56	3.45	1.29
	21 ネット上では、現実社会のさまざまな制約を受けずに自分の好きなようにふるまうことができる。	.57	3.24	1.35
	16 ネット上のパブリックな場所での発言や行動が、他人に不快感を抱かせないようにといつもよく考えている。(逆転項目)	-.51	4.52	1.02
F2	12 現実社会よりネット上の方が、自分の期待に沿う人に多く出会える。	.72	4.02	1.14
	13 ネット上で接している人たちは、現実社会の知り合いより自分と似た価値観を持っていると感じる。	.74	4.33	1.00
	14 ネット上には、現実社会での挫折や苦しみを理解してくれる人がいる。	.68	4.32	1.00
	23 現実社会では見せたくないような自分の一面でも、ネット上では出せる場所がある。	.54	4.41	1.05
F3	5 ネット上の人間関係は希薄なので、いつでもそこから抜け出すことができる。	.74	3.92	1.25
	25 ネット上では、相手との関係を続けたくないと思ったら、いつでも終わりにすることができる。	.54	4.24	1.08
	6 ネット上の人間関係には浅いものが多く、深いつながりはあまりない。	.45	3.73	1.25
	因子間相関	1	.15	.53
		2		-.04

4-4 考察

中国人のデータを使用した確認的因子分析の結果は、MMODの3因子構造が中国人にも適用することを示唆した。さらに、中国語版MMODの因子間相関を分析し、第2因子と第3因子の相関係数が非常に低いことが分かった。つまり、中国人においても、ネット上での人と親しみやすくなる一方で、その親密に見えるような関係がはやく終わる可能性がある。この結果は日本人のオンライン脱抑制の特徴とも整合する。以上より、MMODの3因子構造はオンライン脱抑制の構成概念の複雑さを示せる一方で、頑健性を持つ構造

だと言えるだろう。

日本人と中国人のオンライン脱抑制の得点を分析したところ、中国人が有意に高いことが分かった。この結果は、中国のインターネットの環境的特徴と文化的特徴から説明されていると考えられる。具体的には、近年中国のインターネットが飛躍的に発展しているにもかかわらず、インターネットの環境を維持するポリシーやルールはまだ健全とは言えない。一方、日本では長い間インターネットの発展が進んでおり、比較的健全な制度が確立されている。例えば、日本のプロバイダ責任制限法によると、ネット上でであっても他人の権利を侵害する内容を発信すると、個人情報の開示が被害者に求められることがある。このような制度の存在により、日本人のオンライン脱抑制が有意に低くなると考えられる。

さらに、自己主張における文化的価値観の違いが日本人のオンライン脱抑制の低さにつながると考えられる。毛(2014)は、中国人は日本人よりも対人関係において強い自己主張と自己中心的な特徴を示すと論じている。また、古屋(2010)は、アメリカ人は自己主張をすることで他者と対立することを恐れなくなり、日本人は自己主張を控えることで調和のとれた人間関係を築く傾向があると述べている。川久保(2000)は、中国人はアメリカ人と同じくらい自己主張が強いと述べている。つまり、対面場面では日本人は自己主張を抑えるという文化的価値観から影響を受けているが、オンライン環境においても、その価値観がまだある程度機能している(現実世界に比べれば弱まるかもしれないが、完全に消えていない)。その結果、日本人のオンライン脱抑制は有意に低くなると考えられる。

【参考文献】

- Bagozzi, R. P., & Yi, Y. (1988). On the Evaluation of Structural Equation Models. *Journal of the Academy of Marketing Science*, 16, 74-94. <https://doi.org/10.1007/BF02723327>
- 古家 聡(2010). 日本的コミュニケーション・スタイルのマクロ的再解釈：日本人集団主義説をもとに ヒューマン・コミュニケーション研究, 38, 173-192. https://doi.org/10.20698/hcr.38.0_173
- 川久保 美智子(2000). C 中国人雇用者の意識: 北京, 上海, ハルビンの調査結果 関西学院大学社会学部紀要, 84, 255-261. <http://id.ndl.go.jp/bib/5297804>
- 毛 新華(2014). 中国人留学生の日本文化適応の課題点に巡る留学生自身と日本人の意見の異同に関する比較研究 第 61 回 日本グループ・ダイナミクス学会大会 . <https://kobegakuin-human.jp/wp/wp-content/themes/human/img/pdf/mou/report003.pdf>
- 三浦 麻子・小林 哲郎(2018). オンライン調査における努力の最小限化が回答行動に及ぼす影響 行動計量学, 45(1), 1-11. <https://doi.org/10.2333/jbhmk.45.1>
- 小塩 真司・阿部 晋吾・カトローニ ピノ(2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21(1), 40-52. <https://doi.org/10.2132/personality.21.40>
- Stuart, J., & Scott, R. (2021). The Measure of Online Disinhibition (MOD): Assessing perceptions of reductions in restraint in the online environment. *Computers in Human Behavior*, 114, 106534. <https://doi.org/10.1016/j.chb.2020.106534>
- Suler, J. (2004). The online disinhibition effect. *Cyberpsychology & Behavior*, 7, 321-326. <https://doi.org/10.1089/1094931041291295>
- Udris, R. (2014). Cyberbullying among High School Students in Japan: Development and validation of the online disinhibition scale. *Computers in Human Behavior*, 41, 253-261. <https://doi.org/10.1016/j.chb.2014.09.036>
- Udris, R. (2016). Cyberdeviance among Adolescents: Analyzing the online-offline overlap and predictors of deviant behavior (Doctoral dissertation). Osaka University, Osaka. <https://doi.org/10.18910/56042>
- 温 若寒・三浦 麻子(2022). オンライン脱抑制: 構成概念の再考と新たなモデルの提案. 心理学評論, 65(1), 52-63. <https://hdl.handle.net/11094/89363>

〈発表資料〉

題名	掲載誌・学会名等	発表年月
オンライン脱抑制の構造の日中文化差 – 中国語版多次元オンライン脱抑制尺度の作成 –	日本社会心理学会第 63 回大会	2022 年 9 月
オンライン脱抑制：構成概念の再考と新たなモデルの提案	心理学評論	2022 年 10 月
多次元オンライン脱抑制尺度 (MMOD) の作成および妥当性と信頼性の検討	社会心理学研究	2023 年 7 月
オンライン脱抑制がどのようにネット上での行動に影響を及ぼすか – ネット掲示板閲覧場面を用いてオンライン脱抑制の影響メカニズムを検討する –	日本社会心理学会第 64 回大会	2023 年 9 月